

学も初めての事だらけで大変でしたが充実していました。やがて、そんな大学生活にも慣れ、サークルにも入り、コンパ等色々な楽しい行事がある中で、オーストラリアで感じた思いは次第に薄れていきました。が、サークルの先輩でオーストラリアを一年間自転車で旅をした事のある人がいて、その人の話を聞いたりしていると、また少しずつあの気持ちを思い出すようになってきました。そして、その先輩はこう言ってくれました。「やらずに後悔するより、やって後悔した方がいいと俺は思っている」。私にとって、この言葉は忘れることができない言葉となり、今でもこの言葉を心のささえにしています。そして授業も後期に入り、大学は忙しくなり授業とレポートとバイトに追われる日々が続きました。進級することが、危うい状態にあり、期末テストの中ごろになると疲れきって、しまいには留年した時のことばかり考えるようになっていました。しかし、結局、留年は免れることができました。ところが、留年を免れた私を待っていたものは、4年生になるという事にたいする抵抗でした。その時の私は、このまま4年生になって就職することも、大学院に進学する気にもなれませんでした。結局、海外に行くことが出来るのは、今しかないと考えようになりました。しかし私にとって今回の、休学という道を選ぶことは、初め

での大きな遠回りになるために、悩みました。正直自分でも自分のやろうとしていることが恐ろしく、決断には勇気が伴いました。しかし、先輩の言葉を思い出すと、もしこのまま休学せずに、学校に行ってもきっと後悔する、今しかないと思ひ、一年間の休学を決めました。そして、今日(1999年8月2日)でアメリカに出発する日が後、1ヶ月半ほどに迫りました。休学を決めてから、今日までバイトもしましたが、結構のんびりと過ごして来ました。本当によく寝ました。でも、今はなんとなく、のんびりしてたことも良かったと、思える日がきっと来る様な気がします。しかし、そろそろVacationも終わり。アメリカ出発に向けて、やるべき事がたくさんあります。

今、私はアメリカで一所懸命勉強をしようと思っっています。それだけのエネルギーが体に溜まっているのがわかります。ワクワクドキドキもしています。本当は、恐くて考えれば考えるほど嫌になってくる気持ちもあるのですが、だからといっていまさら逃げる訳にはいきません。とにかく、動きださないと何も始まらないのだから。

最後に、この原稿の話しを持って来ていただき、かつ全面的に協力していただいた、中川先生及び、私の粗末な文章を校正していただいた、村上先生に深くお礼を申し上げます。

## 同窓会助成事業

### ロボコンあれこれ

建設システム工学科教官 西山 等

ロボコンにまつわる話は多々ありますが、世間一般の皆さんはテレビでの放送をご覧になって、あそこのロボットはすごいだとか、あんなへなちょこロボット作ってなにしろんじゃ等々おしゃっているのではないのでしょうか？いずれにしても高専のロボットコンテストは本当に有名になったものです。

ロボットコンテストのそもそもの始まりは、MIT (マサチューセッツ工科大学) の2.70 (ツー

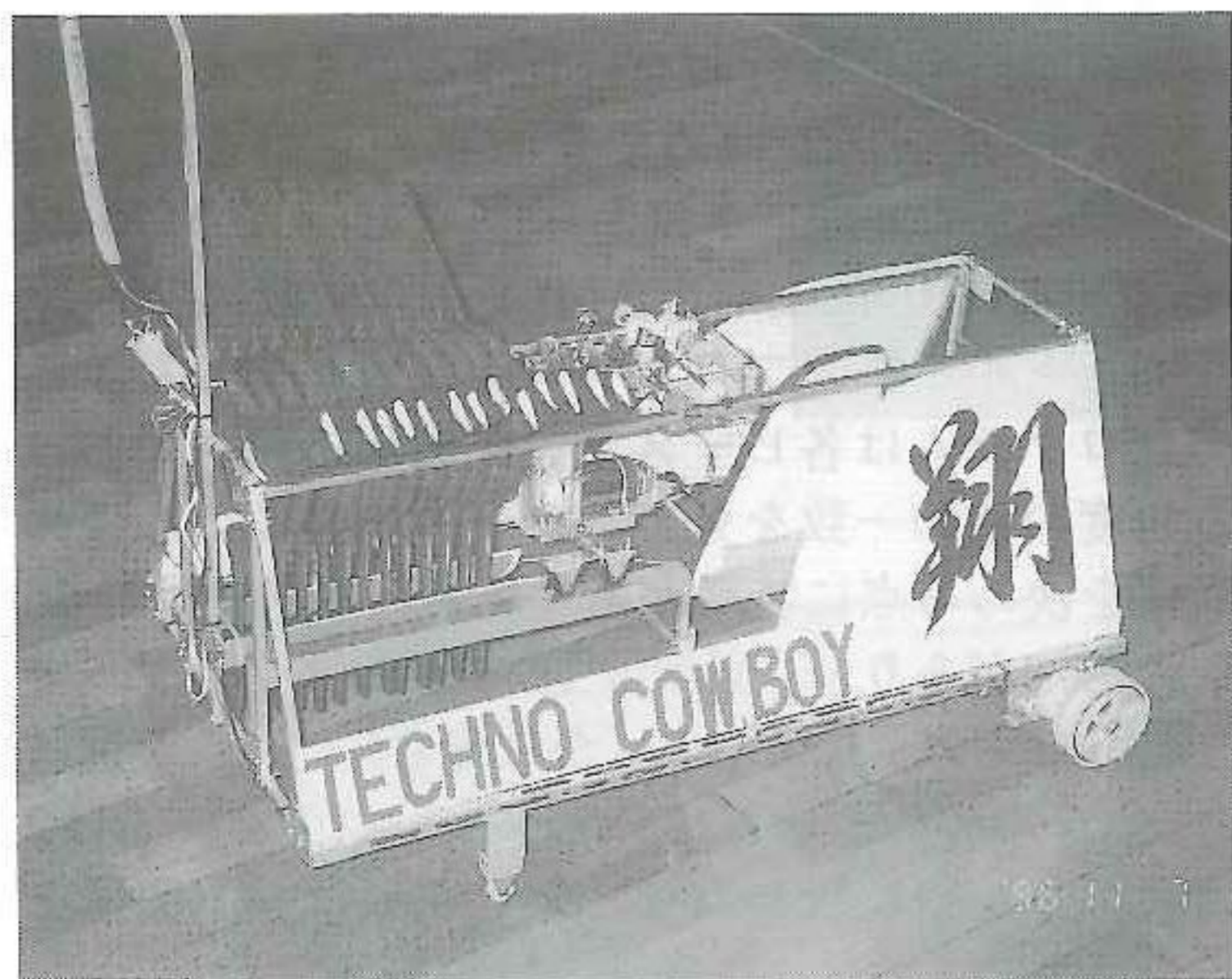
ポイントゼロ) という授業です。その授業をとると2.7単位いただけるという意味でつけられたらしいです。時期同じくして東工大の森先生が、うちでも同じことやっとなるわいということで、頭を柔らかくしているんなものを作る授業を始められました。

このような授業に興味を持ったNHKのスタッフが公共の電波にのせるイベントとしてロボットコンテストの企画を考えたわけですが、工業高校は数が多すぎるし、大学も・・・学校数の規模か

ら最適と選ばれたのが高専でした。

ルールは、森先生をはじめ偉い先生方とテレビ屋のやりとりの中で、まあこんなもんかって決まるみたいですが、一応のコンセプトは学生諸君がルールの盲点を付いてくるのをある程度は期待していて、三つ以上のアイデアが考えられるルール作りを原則としているようです。まあルール自体もやってみなければわからないというところにルールを考える人の楽しみがあるようです。ルールを公表すると高専の学生諸君から色々な質問が実行委員会に寄せられます。たとえば、ルールの中で会場を破壊してはいけないと書いてあると「会場を汚してもいいんですか？」という質問があります。汚すことがたとえば得点につながるのだとすると、そのアイデアは認められます。何せルールブックには破壊してはいけないとしか書いてないわけですから。ルールの曖昧さ、それがアイデアの多様性を生み出す一つのエネルギーになっているのです。

ロボコンの競技で扱う品物、これは当初全国どこでも手に入るもの、たとえばバスケットボール、ラグビーボール、郵パックの箱などいわゆる規格品が選ばれていましたが、これの選択にお偉い先生方は行き詰まったようで、扱うものをある定義のなかで



自分達で作るとい時代がやってきたんです。いわゆる規制緩和の時代です。これがまた、アイデアの多様性を生み出す結果となりました。ロボコンはあくまでもコンテストでロボットの対決ゲームではありません。いわゆるアイデア対決のコンテストです。競技はトーナメント形式で行われますが、いわゆるスポーツ大会のように強いものだけが予選を突破し決勝大会に進めるのではなく、ロボコンはたとえば近畿地区大会なら優勝チームと審査員推薦2チームが全国大会に進めます。そういう意味でロボコンは勝ち狙いだけでなく自分達が考えた突拍子もないアイデアでも、それを実現することによって全国の頂点に光り輝くことができる素晴らしいコンテストです。

舞鶴高専のロボコン参加の歴史も10年を越え、参加する学生達の形態も色々と変わりました。当初は有志学生のグループでスタートし、やはり組織的に活動しないといけないとの認識から同好会として技術科学研究会つづいて電子制御研究会が発足し、これら同好会の主たるメンバーは、現在、3世代、4世代目となっています。その間近畿地区大会で優勝2回、準優勝2回、技術賞1回、アイデア賞2回、全国大会出場4回、全国ベストフォー1回、全国技術賞1回と他高専に引けを取らない成果を収めています。今までのロボコンに参加した諸君は、勝ち狙い、アイデア狙い、そして種々のこだわりなど色々の思いの中で、ロボットを製作したわけですが、どれもこれも本当に素晴らしいアイデアでした。その製作作業は苦勞の連続ですが、アイデアが実現できたとき、そしてそれが評価されたときには苦勞が喜びにかわったと思います。私も指導教官として苦勞が喜びに変わる思いを何回も経験させていただきました。今後も微力ながら学生達の創造性をバックアップしていきたいと思っています。

最後になりましたが、毎年多大なる資金援助をしていただいている舞鶴高専同窓会に対しこの紙面を借りて御礼申し上げます。



第34回高専祭